

委託事業実施内容報告書
平成29年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(B)】

内容報告書

団体名：㈱きぼう国際外語学院

1. 事業の概要

事業名称	ラジオ番組作成・出演による在住外国人の社会参加および日本人住民へ向けた「やさしい日本語」の普及による相互理解促進
事業の目的	・「共生」を目指した地域社会の実現のための在住外国人の日本語力向上 ・在住外国人が主体となるまちづくりのために必要な日本語力と地域理解の促進？ ・実践を通じた在住外国人と日本人住民の相互理解強化 ・在住外国人の社会参加を目的とした日本語教育 ・日本人住民の異文化理解促進を目的とした新たな生涯学習プログラムの開発 本事業の目的は、在住外国人と日本人住民が共に暮らせる地域社会の実現にある。そのためには、①地域在住外国人が日本語学習に意欲的に取り組み日本語を用いた社会参加を促進すること、そして②在住外国人の社会参加に対して日本人住民との相互理解を強化していくことが不可欠である。これらの取組は多文化共生社会の実現に向けた実践として位置づけられる。 具体的には、①ラジオの番組作成・出演によって、在住外国人が、外国人である利点を活かした自己表現や、地域社会へ参画する際に必要な日本語を学ぶ機会を創出する。在住外国人が社会参加のきっかけを得ることによって、日本語学習に対する意欲向上が期待できる。②日本人住民住民には、「やさしい日本語」に触れ、自らも使用する機会(生涯学習プログラム)を提供することによって、在住外国人に対する理解促進を図る。さらに、在住外国人によるラジオ番組作成・出演によって、より多くの日本人住民に在住外国人の取組を知ってもらうことで、地域における多文化理解の促進を図る。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	栃木県内の外国人住民は、3万3千人を超え、出身国も112カ国となっている。在留資格としては、永住者が一番多く、その他、定住者や日本人配偶者を加えると、70%以上が長期滞在できる資格をもつ。さらに宇都宮大学が行った県内外国人労働者調査によると、入国時の在留資格から今の在留資格の変化は、永住者が4倍に増加している。定住者から永住者に変更した割合は、66.7%にのぼり、出稼ぎから定住へと、変わっていることがわかる。回答者の6割以上が10年以上日本に滞在しており、8割以上が仕事を持っている。同調査において、仕事の不満について聞いた項目をみると、不満の要因は、賃金についてが一番高い割合を示し、その次に①「日本語が話せない」②「差別を受ける」という理由の割合が高かった。反対に、満足している要因は、賃金を除き、「日本人とのふれあいが楽しい」、「差別やいじめがない」という理由であった。 以上のことから、在住外国人の日本語能力の問題、そして日本人住民の在住外国人への意識の問題があるということがわかる。 その他、労働政策研究・研修機構がまとめた「勤労生活に関する調査」では、外国人と「一緒に働く」ことについては2割の人が抵抗を感じると答えただけで、「近所に居住する」ことについては4割の人が抵抗を感じると答えている。ただし、この調査では、外国人と働いた経験の有無に違いがあり、在住外国人との接触が普段からある人ほど、外国人に抵抗を感じないことも見えてくる。 上記2つの調査から、在住外国人と日本人住民がより共に生きられる地域の実現には、以下2つの課題があると考ええる。 課題1. 地域社会における在住外国人の日本人住民との接点の創出 課題2. 日本人住民と在住外国人の相互理解 課題1. については、まずコミュニケーションをとるための日本語力が必要となるが、日本語獲得には、日本語学習の必要性を実感すること、日本語を話す機会があること、日本語を使うことに自信を持つことなどが、具体的な課題となる。 課題2. については、日本人住民が在住外国人を理解するための機会を得ること、そして、在住外国人とのコミュニケーションの「手段」を持つことが重要である。 これらの課題の解決にあたっては、国際交流協会やボランティア団体が日本語教室の開催などを行い、その役割を担ってきた。しかし、益々増加している在住外国人に十分対応できているとは言いがたい。特に日本語学習においては、宇都宮大学研究チームが行った栃木県における労働者調査からもわかるように、在住外国人のほとんどが働いており、日本語を改めて学ぶ機会には得にくい。今後は、働いている在住外国人を含めた日本語教育事業や、多文化共生事業が必要だろう。 また、日本人住民が受講できる在住外国人の理解を促す事業は少ない。あつたとしても、その事業はあくまで「国際」や「外国人」に興味関心がある住民に限られるため、結果的にどの事業にも同じ住民が参加している可能性が高い。多文化共生社会の実現には暮らしの中で「在住外国人理解」が進むことが望ましい。在住外国人がいくら日本語を学習しても地域で受け入れられる環境が整わなければ、日本語学習意欲も低下してしまう。在住外国人の日本語学習得の環境改善と意欲向上には、日本人住民が在住外国人を受け入れることが必要だが、「コミュニケーションがとれない」ということで、躊躇し、外国人との積極的な接触は避けている日本人も少なくない。まず外国人と気軽に、同じ住民としてコミュニケーションをとっていくことが重要であり、同時に地域の課題である。そういった日本人へ向けた在住外国人理解促進の強化として「やさしい日本語」の普及が不可欠である。
事業内容の概要	取組1 コミュニティーラジオ番組「外国人の外国人による外国人のためのラジオ」制作のための研修と放送 【目的】 1、外国人住民が外国人であることを活かし、日本語学習の必要性を感じてもらうこと。 2、日本人住民が外国人住民についてその存在意義を理解し、お互いが共生することによって地域の力になることの理解を深めてもらうこと。 3、ラジオ制作に関わることによって、多機関と連携をはかり、外国人住民にとっても、日本人住民にとってもより良い環境を目指すこと。 上記を目的とし、取り組むことによって、課題1「外国人側の日本人とコミュニケーションをとること」および課題2「日本人側の外国人理解」に対応することができる。 取組2 コミュニティーラジオ番組制作のための研修 【目的】 外国人が地域住民として生活していくことはもちろん、外国人が「外国人である」という利点をいかして社会参加し、その際に必要な日本語について、日本人との共同作業をしながら学んでいくことを目的にすることにより、課題1「外国人側の日本人とコミュニケーションをとること」および課題2「日本人側の外国人理解」に対応することができる。 取組3 外国人出演による多文化共生ラジオ番組制作と発信 【目的】 1、栃木県全域に流れるFMIに外国人が出演することで、聴取者である地域住民が外国人の存在を知るきっかけとなる。 2、外国人がどこなところで困ったり悩んだりしているかを聞くことで、近くに住む外国人の理解を促進できると考える。 3、川柳の作成に、日本人が関わることで外国人と触れ合う機会をつくることができ、そのふれあいを通して、外国人理解が進む。 4、日本語教師が番組に出演し、「やさしい日本語」で外国人の話を聞きだしたり、フォローすることで、リスナーが「やさしい日本語」を知る機会を持つことができる。 5. 日本語教師という職業をFMを聞いている人が知るきっかけになる。 上記を目的とすることにより、また、各国際交流協会の日本語教室から川柳を募集することで、受身の参加ではなく、積極的参加になると考えられ、当校と各国際交流協会、FMとちぎと各国際交流協会、FMとちぎと外国人が連携することができる。また、国際交流協会のみならず、「国際」などとは関係ないボランティア団体と外国人と一緒に川柳を作成する機会を創出し、交流がうまれ、地域住民への外国人理解を進めることが出来る。不特定多数のFMリスナーが外国人の気持ちを聞くことで、外国人とつながることができ、外国人の社会参加に欠かせない課題2の「外国人理解」を促進することができる。 取組4 日本人住民を対象とした「やさしい日本語」の基礎講座 【目的】「やさしい日本語」が必要だと思われる団体が講座を開き、「やさしい日本語」について日本人に学んでもらう。その際、外国人住民も入り、実際に参加者である日本人の「やさしい日本語」を検証し、意見交換を行う。 その団体の要望に合わせ、外国人が講師となるプログラムを団体と協力し、作り上げることにより、課題1「外国人側の日本人とコミュニケーションをとること」および課題2「日本人側の外国人理解」に対応することができる。
事業の実施期間	平成29年5月～平成30年3月(11か月間)

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

【運営委員】

1	結城 史隆	白鷗大学 教授
2	行本 リジア	鹿沼市国際交流協会 相談員
3	Sueyoshi Ana	宇都宮大学 准教授
4	小林 忠教	栃木県国際交流協会 事務局長
5	梅木 由美子	元宇都宮大学 教授
6	齋藤 禎	栃木県社会福祉協議会 地域福祉部長
7	鈴木 美恵子	NPO 栃木タイムズ 代表
8	坂本 文子	宇都宮大学地域デザイン科学部附属地域デザインセンター コーディネーター
9	玉木 成雄	栃きぼう国際外語学院 所長
10		



【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成29年6月8日 (金) 18:00～20:30	2.5時間	中央市民活動センター	坂本文子 小林忠教 スエヨシ・アナ 齋藤禎 玉木成雄	1. 事業内容の検討 2. 広報の仕方
2	平成29年10月26日 (木) 18:00～20:30	2.5時間	とちぎ福祉プラザ	坂本文子 小林忠教 行本リジア 神山英子 齋藤禎 玉木成雄	1. 中間報告 2. 事業の改善点等の洗い出し
3	平成30年3月2日 (金) 18:00～20:30	2.5時間	中央市民活動センター	坂本文子 行本リジア 神山英子 梅木由美子 齋藤禎	1. 事業報告 2. 事業の課題の洗い出し 3. 地域課題の洗い出し

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	地域の大学、国際交流協会、ボランティアセンターなど、今まで連携してきた団体のほか、新たに連携ができた社会福祉協議会、別地域の国際交流協会とも協力体制をとった。その他、宇都宮に開局したコミュニティーエフエムと連携し、より在住外国人が地域コミュニティーに参加していくことができるよう連携した。また宇都宮のみならず、栃木県に開局している栃木市、開局準備を進めている小山市とも連携を図り、在住外国人の社会参加を促すことができた。コミュニティーエフエムは公的機関も携わっているため、公的機関に、在住外国人の存在、日本語教育の重要性、日本語教師の存在を知ってもらうことができた。 連携は、団体同士だけではなく、在住外国人との各団体の連携、在住外国人同士、在住外国人と地域日本人との連携も促し、在住外国人の社会参加を図っていった。コミュニティーラジオを通し、各種団体との連携を模索し、地域の多文化共生、または、災害時の在住外国人住民の活用など、在住外国人がより積極的に地域に出て行くための環境を他団体と連携し、進めた。 コミュニティーエフエムは、地域に限定されてしまうが、FM栃木との連携は、栃木県内の各市町、栃木県内企業、近隣県の公共機関団体、企業などと在住外国人、または、日本語教育関係機関が連携できる可能性がある団体であるため、在住外国人とそれらの機関が知り合うことは、それらの機関と各国際交流協会、留学生が所属する大学、所属している派遣機関へと連携を広げることができた。 外国人に関係があるという団体だけではなく、一見外国人とは関係のないような機関がこの取組に参加できるようにした。特に、ラジオを通した地域住民であるリスナーに気づきを与え、外国人、日本人ともに住みよいまちづくりができるよう、住民との対話という連携もできた。
------	---

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

実本 施事 体業 制の	コーディネーターは、申請団体として事業に取り組み、過去の連携を維持、強化し、より一層の日本語教育への理解等を進めた。指導者は、外国人への日本語教育のみならず、日本語教育の知見をいかし、日本人や各団体と外国人をつなぐ役割を果たすことができた。運営委員会には、県内の大学教授、福祉関係者、県国際交流協会のメンバーが関わっているため、申請事業の連携を、それぞれの専門をいかし、地域福祉から見た外国人、まちづくりから見た外国人など、様々な観点から、事業の評価をした。また、それぞれの団体が協力体制が取れるかどうかを検討することができた。
----------------------	---

11	平成29年11月13日 (月) 17:00～19:00	2	ミヤラジ	1	ラジオ生放送・直前 打ち合わせ	ラジオで流す曲を選び、ラジオ放送の 流れを確認し、原稿の確認をし、放送 に入る	神山英子	
12	平成29年11月27日 (月) 17:00～19:00	2	ミヤラジ	1	ラジオ生放送・直前 打ち合わせ	ラジオで流す曲を選び、ラジオ放送の 流れを確認し、原稿の確認をし、放送 に入る	神山英子	
13	平成29年11月11日 (月) 17:00～19:00	2	ミヤラジ	1	ラジオ生放送・直前 打ち合わせ	ラジオで流す曲を選び、ラジオ放送の 流れを確認し、原稿の確認をし、放送 に入る	神山英子	
14	平成29年12月25日 (月) 17:00～19:00	2	ミヤラジ	1	ラジオ生放送・直前 打ち合わせ	ラジオで流す曲を選び、ラジオ放送の 流れを確認し、原稿の確認をし、放送 に入る	神山英子	
15	平成30年1月5日 (金) 17:00～19:00	2	宮カフェ	2	原稿の作成方法	ラジオ放送の原稿の書き方を学ぶ	神山英子	
16	平成30年1月8日 (月) 16:00～19:00	3	ミヤラジ	1	ラジオ放送の流れ・ ラジオ生放送・直前 打ち合わせ	ラジオ放送の流れについて学び、ラジ オで流す曲を選び、ラジオ放送の流 れを確認し、原稿の確認をし、放送に 入る	神山英子	
17	平成30年1月22日 (月) 17:00～19:00	2	ミヤラジ	1	ラジオ打ち合わせ	ラジオで流す曲を選び、ラジオ放送の 流れを確認し、原稿の確認をする	神山英子	
18	平成30年1月29日 (金) 17:00～19:00	2	宮カフェ	2	日本語の発音方法	ラジオ放送に出演するための日本語 の発音について学ぶ	神山英子	
19	平成30年2月2日 (金) 17:00～19:00	2	宮カフェ	2	原稿の作成方法	ラジオ放送の原稿の書き方を学ぶ	神山英子	
20	平成30年2月12日 (月) 17:00～19:00	2	ミヤラジ	1	ラジオ生放送・直前 打ち合わせ	ラジオで流す曲を選び、ラジオ放送の 流れを確認し、原稿の確認をする	神山英子	
21	平成30年2月26日 (月) 17:00～19:00	2	ミヤラジ	1	ラジオ生放送・直前 打ち合わせ	ラジオで流す曲を選び、ラジオ放送の 流れを確認し、原稿の確認をする	神山英子	
22	平成30年3月3日 (金) 17:00～20:00	3	宮カフェ	7	反省会	ラジオ出演者が集まり、ラジオの生放 送に出演した感想や友人知人からの 反響を話し合った。	神山英子	

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第10回 29年11月2日】

ラジオ放送の原稿の書き方を学ぶ

まず、コミュニティラジオの出演になるので、宇都宮市に関する話題をラジオ聴衆に向けて話す必要があることを日本語教師が出演者に説明し、その上で出演者に「何を話したいか」日本語教師がインタビューをし、その内容を原稿としてまとめてもらった。その後、日本語教師が内容を確認し、文法などの誤り、表現を付け加える等の作業をし、出演者と再度原稿を確認し、模擬放送のつもりで音読練習を繰り返した。また、帰宅後に内容の変更がある場合はメールでやりとりをした。今回の出演者は、奥様が宇都宮にお住まいで、同居しているご両親とのエピソードと、宇都宮がとても住みやすく、楽しいことがたくさんあるという話をするとまとめていた。



○取組事例②

【第16回 30年1月8日】

「ラジオ放送の流れについて学び、ラジオで流す曲を選び、ラジオ放送の流れを確認し、原稿の確認をし、放送に入る」

・放送前

パーソナリティ、日本語教師、外国人ゲストの3人で放送をすることを確認し、番組の流れを確認した。冒頭部分と一時間の放送時間の間に合計4曲入るので、自分の好きな日本の曲を選び、その曲についてのエピソードも紹介することを確認した。自己紹介・話したいことの確認をし、マイクの位置やスタジオでのルール(飲食禁止など)も確認後、スタジオ入りし、生放送となった。

・放送

出演者が緊張していたが、話すことが決まっていたので、徐々に緊張が解け、スムーズに進行することができた。

・放送後

出演者は「また出演して、自分のことを話したい」と言い、ラジオ局スタッフからは、「外国の方の方が日本を知っていることがわかってよかった。」と感想をいただいた。



(2) 目標の達成状況・成果

「外国人が地域住民として生活していくことはもちろん、外国人が外国人であるという利点をいかして社会参加し、その際に必要な日本語について、日本人と協働作業をしながら学んでいく。」という目標は概ね達成できた。ラジオ放送を通し、外国人ならではの目線で日本の生活や日本人とともに生きていくこと、日本の文化や習慣等について発信することができた。出演者の感想によると、事前の日本語教師との打ち合わせで話したい内容を確認し、表現を学ぶという共同作業を通して、新たな学びも得たようだった。その他出演者の感想には、外国人住民が主体的に日本語を使って話したいことをラジオ番組で話せたことが「大変良かった」「また出演したい」という内容もあった。また、ラジオ局のスタッフからも「外国出身者が流暢な日本語を使って地元のことを話してくださることに感激した。良い番組なので是非継続を。」という感想があった。

(3) 今後の改善点について

改善点① 生放送に向けての日本語の練習不足

日本に住む外国人住民も、長年日本に住んでいるとはいえ、ラジオの生放送となると緊張してうまく話せない場面が何度もあった。課題としては、緊張感を持った事前練習が少なかったことが理由として考えられるので、生放送前に何度も練習してからの方が良いと思われる。実際には時間があるときにしかできなかったが、回数を決めて実施した方がよかった。また、今回はラジオ局スタッフ多忙のため、発音練習はできなかった。もしできていれば、出演者が安心して生放送に臨むことができた可能性はある。

改善点② 出演者選定

放送が開始する前は、出演者を探すのに苦労した。国際交流協会に依頼したが探すことができず、知り合いを介してということになってしまった。本来であれば、放送の趣旨である「外国人住民の社会参加を促し、日本人市民と交流する」ということを目標とするので、国際交流協会やマスコミにお願いして広く募集すると良かった。しかしながら、後半からは「出演したい」という外国人住民もいて、少しずつコミュニティラジオに外国人住民が出演していることが知られていったようだった。番組が存続すればさらに良いと思われる。

＜取組2＞									
取組2	取組の名称		コミュニティラジオ番組制作のための研修（日本語指導）						
	取組の目標		ラジオ制作のため外国人が各種団体に外向くことにより、外国人の日本語力の向上はもちろん、外国人の存在を知ってもらう機会となる。また、日本語教師が付き添うことで、日本語教師の存在はもとより、外国人対応のプロがいることを知ってもらう。また、「やさしい日本語」に日本人住民が実際に触れる機会となり、「やさしい日本語」が広がっていく。						
	取組の内容		取組1で行う番組制作のための取材をした。 番組を制作する外国人は、宇都宮市国際交流協会から推薦、または栃木県国際交流協会を通して募集した。 コミュニティラジオと外国人については、神戸コミュニティラジオをはじめ、多地域で実践され、災害時などにも効果を発している。しかしながら、栃木県にはコミュニティエフエムがなく、外国人が頼れる場所、または活躍できるラジオ放送はなかった。28年度栃木市に県内初めてのコミュニティラジオが開局したが、外国人の活用はまだない。昨年開局した宇都宮市の「ミヤラジ」は栃木県第2番目のコミュニティエフエムである。栃木県の県庁所在地である宇都宮は、外国人数は県内1位であり、多様な国の外国人が存在する。そういった場所でのコミュニティラジオは、外国人が常時間くようなラジオにしなければならない。そのためには、「このラジオが必要だ」と普段から思ってもらわなければならない。そういったコミュニティラジオにするため、外国人のアイデアによる外国人も聞きたいような番組を作成し、常時コミュニティラジオを聴く習慣が外国人も持てるよう、災害時だけでなく、外国人による楽しい番組作りを目指した。 そのため、外国人自ら企画し、番組を制作するために必要な情報を集め、団体に交渉し、取材を行い、イベントへの参加を申し込んだ。その際、取材の方法をコミュニティラジオ担当者から指導してもらい、日本語教師が取材先への電話応答などの指導を行った。 ラジオ制作のために必要な材料を得るために、各団体への取材、または、イベントへの参加をし、日本人から情報を得る活動をした。その際、日本語教師も同行し、取材時の日本語の表現等の指導を行った。 各種NPO、ボランティア団体への取材の申し込みや、地域で行われているイベントに参加し、その内容をラジオ番組で放送できるようにまとめた。内容のまとめは、日本語教師の日本語指導のもと行った。						
	取組による体制整備		外国人が興味を持っている団体、個人との連携、また団体を紹介してもらうためのボランティアセンターと外国人が連携をすることにより、外国人が社会参加をするための足がかりを得るだけでなく、各団体や日本人住民が外国人の存在を知る機会となり、外国人理解の促進が見られた。						
	取組による日本語能力の向上		取材準備をするための日本語（アポイントをとる、取材の内容を決める、取材先の情報を調べるなど）や、取材をするための日本語（取材時の質問をするための日本語、聞き出したい内容を聞くための質問を考えるなど）に向上が見られた。						
	参加対象者		在住外国人及び趣旨に賛同する日本人住民				参加者数 （内 外国人数）	15人 （ 15人）	
	広報及び募集方法		宇都宮市国際交流協会からの推薦や、栃木県国際交流協会からの発信により、興味のある外国人を募集した。 ラジオ制作に携わる外国人が取材したい団体などを決め、直接交渉を行った。						
	開催時間数		総時間 18 時間（空白地域 時間）						
	主な連携・協働先		各種NPO団体、自治会、警察、消防						
参加者の出身・国別内訳 （人数）		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
		2	2	2	0	3	2	1	1
		イタリア(1名)、パキスタン(1名)							
実施内容									
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容		指導者名	補助者名
1	平成29年7月13日 （月）14:00～17:00	3	きぼう国際外語学院	5	イベント開催の心得	イベント開催するにあたってやらなければならないこと、注意などについて講義		栗又由利子 （堀部氏）	
2	平成29年8月7日 （月）17:30～19:30	2	きぼう国際外語学院	5	イベント開催の心得2	イベント開催するにあたって宣伝、広告の仕方の講義		栗又由利子 （堀部氏）	
3	平成29年8月11日 （月）17:00～20:00	3	ミヤラジ	6	ラジオ放送について	コミュニティラジオとは何か		神山英子 （稲葉氏）	
4	平成29年8月14日 （月）17:30～19:30	2	ミヤラジ	4	ラジオ放送について	ラジオの効果、放送上の注意など		栗又由利子 （稲葉氏）	
5	平成30年1月11日 （木）18:00～20:00	2	きぼう国際外語学院	6	就職活動について	日本の会社はどんな人材を欲しているか		栗又由利子 （岡田氏）	
6	平成30年1月25日 （木）18:00～20:00	2	きぼう国際外語学院	4	就職活動について2	面接で好印象を持ってもらえるには		栗又由利子 （岡田氏）	

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第4回 29年8月14日】

ミヤラジというコミュニティーラジオについて稲葉氏から話を聞き、コミュニティーラジオの可能性、また活用方法などについて学んだ。外国人が実際に出演する番組を作成するにあたり、やりたいこと、やってみたいことなどを話し合った。「外国人は苦労している」という話よりも、「宇都宮に住んでいてよかったこと、宇都宮について知っていること」を話そうということになった。日本語教師が間に入り、外国人と日本人、双方の考え方をうまくラジオにのせるための調整役となった。

最終的に、番組の内容が決まり、実際に出演する順番が決まった。この際、音楽など著作権の扱いなどについても、稲葉氏から教えてもらった。パーソナリティーも、ミヤラジも、外国人が実際に出演する番組というのは初めてということで、外国人も含め、お互いいい番組にしたいと番組放送を楽しみに、講座を終了した。



○取組事例②

【第6回 30年1月25日】

留学生を中心に、就職の際、面接で好印象を持ってもらうためにはどうしたらいいかについて、岡田氏から話を聞いた。まず、日本の就職活動を見て、疑問に思っている点やわからない点について話した。その後、自国との違いや、若者が目指している職種の話などをした。

面接についても指導を受けた。日本語力も面接ではやはり大切だと感じたようであった。普段は何も問題なく話しているが、やはり、人前だと緊張してしまい、うまく話せない、うまくまとまらないという意見が出た。

日本人でも同じように緊張してしまう人がたくさんいること、しかし少なくとも、留学生は2ヶ国語が話せるので、そういったことに自信を持って、面接に臨むことも大切だと最後に勇気をもらうことができた。



(2) 目標の達成状況・成果

今回は、日本語がよくわかる外国人住民だったため、日本人が「やさしい日本語」を意識するまでには至らなかったが、専門用語等は、多少日本語教師が噛み砕いて説明をする場面があった。取組を通して、外国人住民の存在について知ってもらうことは出来た。特に、イメージとは違う、「日本語がよくわかる外国人」がいるということを知ってもらえたことは、意図してはいなかったが、効果があったと思われる。日本人側の感想として、「こんなに日本語が上手なんて」「日本語が上手だね」「日本語、すごいですね」という言葉が出るということは、無意識に「外国人は日本語があまり上手ではない」から、「コミュニケーションが難しい」という図式が出来上がっていると考えられる。そういった考えを変化させることが出来たことは、この取組の成果である。

(3) 今後の改善点について

この取組も参加者募集について、いろいろな方法を使ったが、難しかった。ラジオ放送につながるということで、興味を持ってきていたが、時間の調整などが難しかった。また、宇都宮市国際交流協会等に参加者募集について相談したが、そこからの参加者はいなかった。

この取組だけではないが、どのように人に声を掛けるか、また、興味を持ってもらえるかは非常に難しいと感じた。街や、県全体の関係者で連携をしたいが、それには時間がかかるということがわかった。改善点としては、外国人と関わりのある団体と、常にひとつでも企画、運営を共に行うことだろう。特に公的団体は、年度前に予算、企画が決まってしまうため、他の団体が企画を持ち込んで連携するのは難しい。また、参加者の協力であっても、自団体が関わっていないことに対する警戒感がある。今後連携するには、更に交流を深く持っていくことだと考える。

＜取組3＞									
取組3	取組の名称		外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信（日本語指導）						
	取組の目標		外国人が作成した川柳をラジオで聞く、または目にすることで、地域に住んでいる外国人に関心を持ち、外国人理解を促進するきっかけとする。						
	取組の内容		各国際交流協会に呼びかけ、自分の日本での経験を、川柳として詠んでもらい、集まった中から優秀作品を選び、その川柳を詠んだ外国人に、ラジオ出演をしてもらった。1週間に1回3分間のラジオ番組内で、その句を詠んだ背景や、今の生活などを語ってもらい、FMのリスナーに楽しく、在住外国人について知ってもらった。優秀作品は毎週選出し、その作品はフェイスブックなどを使い広めた。ラジオ番組内で日本語教師は、外国人の話を「やさしい日本語」で聞き出し、聴取者にわかりやすいよう説明を加えた。各国際交流協会の日本語教室ボランティアには、川柳作成の補助をしてもらった。地域のイベントなどで、作品の発表を行った。番組収録前には、1人1時間ほど、日本語教師が発音指導、日本語の受け答えの指導、顔の表情を見ることができないため、イントネーションや、声の明るさ、大きさなどを指導した。						
	取組による体制整備		各国際交流協会の日本語教室から川柳を募集することで、受身の参加ではなく、積極的参加が促され、当校と各国際交流協会、FMとちぎと各国国際交流協会、FMとちぎと外国人が連携することができた。また、外国人とFMリスナーがつながることができ、外国人の社会参加に欠かせない「外国人理解」を促進することができた。						
	取組による日本語能力の向上		日本語教室としての直接的な取組ではないが、川柳を作成するという時点で、伝えたいことを言葉にするための日本語を学び、また川柳という日本文化に触れることができた。選出された外国人は、公の場で日本語を話すことになり、改めて、日本語の会話等を学ぶことができた。						
	参加対象者		ラジオ番組聴取者 川柳作成は在住外国人に限る。			参加者数 （内 外国人数）		26人 （ 26人）	
	広報及び募集方法		各国際交流協会にチラシ等を配布し、応募を募った。SNSも活用し広報を行った。ラジオ内でも宣伝をし、広く番組を聴取してもらった。						
	開催時間数		番組作成時間 約26時間 番組放送時間 約1時間						
	主な連携・協働先		レディオベリー、各市町国際交流協会、栃木県国際交流協会						
	参加者の出身・国別内訳 （人数）		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ
		1	11	2	0	2	1	2	1
		イギリス（1人）、カンボジア（1人）、マレーシア（1人）、ナイジェリア（1人）、スリランカ（2人）							
実施内容									
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容		指導者名	補助者名
1	平成29年7月12日 （水） 17:30～19:30	2	レディオベリー	2	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
2	平成29年7月23日 （日） 9:00～12:00/13:00～17:00	7	レディオベリー	7	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
3	平成29年8月21日 （月） 17:30～18:30	1	レディオベリー	1	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
4	平成29年8月23日 （水） 17:30～20:30	3	レディオベリー	3	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
5	平成29年8月29日 （火） 17:30～18:30	1	レディオベリー	1	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
6	平成29年10月23日 （月） 17:30～19:30	2	レディオベリー	2	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
7	平成29年10月30日 （月） 17:30～18:30	1	レディオベリー	1	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
8	平成29年11月8日 （水） 17:30～18:30	1	レディオベリー	1	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
9	平成29年11月9日 （木） 17:30～18:30	1	レディオベリー	1	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
10	平成29年11月14日 （木） 17:30～18:30	1	レディオベリー	1	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
11	平成29年12月6日 （水） 17:30～19:30	2	レディオベリー	2	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
12	平成29年12月27日 （水） 17:30～19:30	2	レディオベリー	2	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
13	平成30年1月8年 （月） 17:30～18:30	1	レディオベリー	1	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	
14	平成30年1月15日 （月） 17:30～18:30	1	レディオベリー	1	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子	

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第6回 29年10月23日】

宇都宮在住のタイ出身女性と、そのお子さん(父:日本 母:タイ)が出演した。初め、母親のほうは、「日本語が上手じゃないから」と出演をしぶっていたが、娘さんから「お母さん大丈夫だよ。やったほうがいい」という後押しがあり、出演してくれた。娘さんはタイ生まれで、タイではインターナショナルスクール、日本人学校に通っていた。2年前、来日し、公立の学校に通っている。3ヶ国語を話すことができ、自信を持って生活していることが良く分かった。反対にお母さんは、N2合格ではあるが、自分の日本語には自信がないと、今でも日本語教室で日本語の学習を続けている。日本の生活にも問題なく溶け込んでいるようだが、人前で話すことなどは嫌いではないが、「日本語」に心配があった。

今回のラジオ出演は、彼女を大きく後押しした。娘さんの応援ももちろんのこと、家族や日本語教室の先生ではない日本人(外部の日本語教師、ラジオ局関係者)が彼女の日本語を認め、日常的な会話ではなく、まとまった話ができたと、順を追って話をすることができたなどが、彼女の日本語への自信につながったと考えられる。

その後、当校のタイ語通訳もしてくださるようになった。この通訳も前々からお願いしてきたが、日本語に自信がないということで、断っていた。しかし、収録の次の週のタイ語通訳をお願いしたところ、快く引き受けてくれた。こういった変化は、ラジオ出演があつてこそと考えられる。



○取組事例②

【第12回 29年12月27日】

今年度のこの取組では初めて、日本語学校が参加してくれた。授業の一環として川柳に取組み、応募するという形であった。たくさんの川柳の中から、当校の日本語講師の投票で優秀賞を決定し、ラジオ出演をもらった。どの作品も個性的で面白く、甲乙つけがたいものであった。

合計4名の学生が出演し、来日理由や、将来の夢、アルバイトのことなどを語った。川柳の内容も、日本人配偶者等とは違った視点で書かれており、興味深い作品だった。

特にこの回の2名は、日本語もうまく、日本についていろいろと語ってくれた。引率の日本語の先生も知らないようなこと、ラジオ局の方がびっくりするようなことなど、3分ではもったいないような内容であった。

出演者も満足しており、アルバイト先で自慢したいと言っていた。また引率の先生も、学生のモチベーションもあがり、また作ったときではわからなかった話も聴くことができ、とても楽しかったと述べていた。授業の時間に生で放送を聴いて、みんなで感想を言ったりする授業を考えているということであった。



(2) 目標の達成状況・成果

出演者の収録後のインタビューでは、「楽しかった」と「緊張した」がほとんどであった。始める前は、「うまくできるか心配」「私の日本語でも大丈夫か」「日本語がわからなかったらどうしたらいいか」などの意見があった。しかし、終了時のインタビューでは、「緊張したけど楽しかった」「なんとか話せた」「私の日本語は大丈夫だったか」などの感想であった。「やってよかった」というのが出演者全員一致した意見であった。「日本人に自慢したい」など、全員が出演をプラスに捉えていた。また日本語教師の立場として、彼らの日本語は、会話を成り立たせるという点では問題なかった。しかし、人によっては、こちらがコントロールをし、「やさしい日本語」で話すという配慮が必要であった。その他、順序だてて話す、意見をまとめて話すなどは、普段の生活でどんな日本語を使っているかによっても差があった。

川柳指導者へのインタビューでは、「思ったよりよくできた」「いろいろと話してくれて楽しかった」「こちらが勉強になることが多かった」「彼らの気持ちをうまく反映して助言できたか心配」などの意見が上がった。指導者側も川柳の指導をしながら楽しく日本語指導も出来たということであろう。また、「こんな風に考えていたのか」「こんな見方があるのか」「他の国と日本の違いがわかった」など、日本人側が学ぶことも多かったようである。

聴取者の意見は、SNSと番組を聴いたという方へのインタビューで回収した。SNSでもインタビューでも、「なるほど」「そういう見方もあるのね」「面白い」「ほのぼのした」などの意見が多かった。日本人と違った視点を川柳という「軽い」形で、外国人と関係ないと思っている不特定多数の日本人に知ってもらえたという点では効果があった。冊子についても、鹿沼市では国際交流協会の協力で病院や、介護施設などにも置いていただいた。ラジオだけでなく、こういった形でも外国人の存在を身近に感じてもらえれば、「隣の外国人」への理解が進むと考えられる。

(3) 今後の改善点について

3年を通して、80名弱の外国の方に出演してもらい、たくさんの川柳、そして、日本について感じたことなどを聞くことができた。「軽い」気持ちで聞くことができ、また構えずに、外国人のことを理解できるという点では非常に効果があったと思われる。実際、JFN賞(全国FM放送協会)の地域賞を受賞することができた。この賞は、日本全国のFM放送の番組から、それぞれの地域でいい番組だと思うもの、または、この賞のために作成した番組を応募し、賞をきめるというものである。その中で、賞のために制作した番組ではなく、地域賞が授与されたのは、当番組だけであった。この番組が「日本語教育」という分野ではなく、他の分野から評価を得られたことは、本当に価値があるものだと思われたことであり、非常にうれしかった。

しかし、この評価があっても、この番組を続けてもいいとスポンサーになってくれるところは、今のところない。関わる人ほとんどが、高い評価をしてくれ、また、続けたほうがいいという声もたくさんあった。しかしながら、これを続けるために実際のスポンサーとしてお金を出してくれてはいない。この部分が、この番組だけでなく、対「外国人」や多文化共生の課題ではないかと考える。外国人に対する活動は今でも「支援」であり、それは、支援する側が得をするような図式には考えられない。特に多文化共生などは、誰が得をするのは見えない。いろいろな人に気持ちはあっても、実際にスポンサーになったり、そのために動く人は少ない。社会的貢献としてもまだ認知されていないのではないかと感じた。障がい者支援や、貧困支援などは、自分に得はないが、社会的貢献としての認知度が高い。しかし、外国人支援はまだそういった感覚がうまれてこない、または、うまれないのではないかと考えている。外国人が近くに存在していること自体がわからない日本の中で、外国人のために、多文化共生のためにスポンサーになるということは、まだまだないと言することができる。これは、この事業だけでなく、多文化共生などの活動を行う場合の課題であると感じている。

今後、もっと外国人を身近に感じ、これが社会にとって必要だと感じられる活動を続けていきたい。

＜取組4＞									
取組 4	取 組 の 名 称		日本人住民を対象とした「やさしい日本語」の基礎講座						
	取 組 の 目 標		外国人が参加する「やさしい日本語講座」を開催し、現実により近い「やさしい日本語」の実践の場とする。日本人の外国人理解を促進し、また、日本人住民に日本語教育について理解してもらうことを目標とする。地域にて、外国人が社会参加していくには、外国人の日本語習得のみならず、受け入れ側である日本人の外国人理解、コミュニケーション術が必要である。日本人が地域住民である外国人の母語を習得するには無理があるが、「やさしい日本語」であれば習得可能であり、どんな外国人とも交流ができる。そういった、一定の配慮が必要な外国人とのコミュニケーションツールとしての「やさしい日本語」を地域に広めること、またそれを学ぶことにより、外国人理解を進めることを目標とする。また、講師として参加した外国人も、「やさしい日本語」の普及が自分たちの生活にも役立つことがわかり、日本語学習へのきっかけとなる。「日本に在住する外国人も最低限の日本語を覚えよう」と考え、家族や友人へ日本語学習の重要性を訴えるようになる。日本語教師が講師をすることで、地域での国際化、多文化共生に、必要な人材であることを、講座に参加した公的機関に認知してもらう。						
	取 組 の 内 容		「やさしい日本語」が必要だと思われる団体で講座を開き、「やさしい日本語」について日本人に学んでもらった。その際、外国人住民も入り、実際に参加者である日本人の「やさしい日本語」を検証し、意見交換を行った。その団体の要望に合わせ、外国人が講師となるプログラムを団体と協力しながら作成を行った。今後「やさしい日本語」が必要だと思われる分野で、「やさしい日本語講座」を開催した。実際に外国人と会話をし、「どうしたら通じるのか」「どうして通じないか」を体験し、自分自身の「日本語」に関心を持ってもらった。その後、講師が「やさしい日本語」の基礎知識、使い方などを講義した。						
	取組による体制整備		2020年の東京オリンピックの外国人通訳や、外国人ガイドを育てるため、観光協会とも協力した。団体と一緒にプログラムを作成することで、団体へ直接外国人理解のための情報を提供することができた。また、日本語教師が、日本語のプロであるだけでなく、外国人理解や、異文化理解のプロであることの理解を深めた。各団体の日本人と在住外国人が知り合い、日本人が外国人を知り合い、外国人の社会参加の足がかりを作ることができた。また講座を通し、「やさしい日本語」の使い手になってもらうことで、外国人が地域で生活していく中での拠り所となる存在となった。日本語教師がその講座を担当することで、各団体の日本人に日本語教師の存在を知ってもらい、今後の多文化共生社会のリソースとして考えてもらうことができた。外国人、日本人ともに日本語でのコミュニケーションができることは、お互いに利益であると感じてもらい、日本語教育の必要性を感じてもらうことができた。						
	取組による日本語能力の向上		当取組は、外国人への直接的な日本語教育ではないが、講師補助として参加した外国人は、「やさしい日本語」で交流することで、さらに自分の日本語を見直す機会となった。						
	参加対象者		受講者：各団体に所属している日本人（看護学校、市職員、福祉関係など） 講師：外国人講師（日常会話の日本語がわかる人）				参加者数 （内 外国人数）		112人 （ 23 人）
	広報及び募集方法		チラシを作成し、配布した。各回1地域を中心に募集し、広報へ掲載した。フェイスブックなどのSNSも活用し、広く募集した。						
	開催時間数		総時間 10 時間（空白地域 時間）						
	主な連携・協働先		各市国際交流協会、宇都宮市国際交流プラザ、観光協会等						
	参加者の出身・国別内訳 （人数）		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ
		3人	5人	2人			3人	3人	5人
		カンボジア（1人）							
実施内容									
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容		指導者名	補助者名
1	平成29年11月22日 （水）18:00～20:00	2	白鷗大学	25	やさしい日本語とまちづくり	まちづくり担当市役所職員に向け、やさしい日本語の有効性とまちづくりの関係を講義		栗又由利子	
2	平成30年1月19日 （金）18:00～20:00	2	とちぎ福祉プラザ	6	やさしい日本語と福祉	県内の様々な福祉分野と外国人、やさしい日本語について講義		栗又由利子	
3	平成30年2月4日 （日）14:00～16:00	2	佐野市役所	43	やさしい日本語ってなに？	国際交流関係者、高校生、地域の方向けに、やさしい日本語と外国人について講義		栗又由利子	
4	平成30年2月14日 （水）18:00～20:00	2	清原台4丁目公民館	15	やさしい日本語のポイント	地域のサロン運営団体に向け、外国人とやさしい日本語で話すポイント等について講義		栗又由利子	

（1）特徴的な活動風景（2～3回分）

○取組事例①

【第1回 29年11月22日】

市役所職員の自主研究グループSTONYで講座を行った。研究グループは、まちづくりに興味があり、いろいろな知見を自治体の運営にかそうと、月に1回集まり、輪番制で講師等と呼び、研究、講座を開催している。その1回分で、「やさしい日本語講座」を開催した。

地域に住む外国人に参加してもらい、日本語がわからないふりをしてもらい、コミュニケーションをとり、日本人にコミュニケーションの大変さを味わってもらった。その後、実際には日本語がよくわかることを説明し、その時感じたこと、また、日頃市役所等で感じていることを話してもらった。

参加者からは、「実際の経験の後に講座の内容を聞くと、本当によく頭に入る。というか、心に沁みる」「自分の日本語がどうしても難しくなってしまうことがわかった」「わからないという意思表示をされた後、どうしたらいいかわからなかった」



○取組事例②

【第3回 30年2月4日】

佐野市国際交流協会の25周年記念事業と合わせ、「やさしい日本語講座」を行った。時間をいただき、「やさしい日本語」についての説明と、参加していた外国人の方と一緒にワークショップも行った。

当校が独自で行う講座ではないため、参加者の確保ができた。特に、市の国際交流協会の事業ということもあり、いろいろな分野の方が集まっており、そういった方々に話を聞いてもらえたことは非常によかった。また、補助者としての外国人もこの記念事業の参加者であるため、ボランティアとして、講座後半部分のワークショップに参加してもらえた。

協会からも、「参加者が楽しかったと言って帰っていった。特に、外国人のみなさんが楽しかったと言ってくれたことは本当にうれしかった」という感想をいただいた。

地域の高校の校長先生も参加者として話を聞いており、またこの記念事業のお手伝いをその高校の生徒がいていたこともあり、「とてもよかったので、学校新聞に栗又さんの話を載せたいがいいか」という問い合わせをいただいた。チャンスがあれば、高校でも話してもらいたいということであった。

その他、地域でボランティア活動をされている女性団体で、当日参加していた方からも講演依頼があり、市の男女共同参画課職員も参加する団体の行事での講演をお願いされた。

「やさしい日本語」が持つ、外国人だけでなく、人とのコミュニケーションの基礎が伝わったのではないかと考えている。日本語教師が日頃から持っている「人の話を聞く」「相手に合わせる」という信念が、これからの日本の社会の中で必要とされていることを感じた。



(2) 目標の達成状況・成果

今年度は、「やさしい日本語」講座の開催にあたり、開催相手を探すことに非常に苦労した。しかし、開催に協力してくれた団体からは、非常に高い評価をもらうことができた。実際に外国人を話す機会が少ない人たちは、外国人とのコミュニケーションの難しさと、自分の日本語の難しさ、そして「やさしい日本語」の可能性を知ることができたとの感想をもらった。また、外国人とコミュニケーションをとることで、外国人への理解が進んだと考えられる。実際に終了後のインタビューでは、「外国人の人と話して、なんだか面白かった」「外国人の人とじっくり話したのは初めて。楽しかった」などの感想を聞くことができた。

外国人側も、楽しかった、面白かった等の感想を聞くことができた。自分が感じていることを話す場面では、「やさしい日本語を使ってくれるとうれしい」など、やさしい日本語が有用であることを、当事者の口から聞き、より信憑性も高まった。外国人自身も、日本人のためにわからないことを「わからない」と言えるのは、なんだかよかったという感想もあった。

双方とも、楽しく、コミュニケーションをとる手段を学ぶことができ、また、日本語教師という職業の者が、こういったことができる、または、日本語教師だからこそできるということを、地域の方に知ってもらえたことは、この取組の成果である。

(3) 今後の改善点について

今年度の講座は、開催の相手を見つけることが一番苦労した。昨年までは、直接、協働開催が見込めるところに交渉をしたことで、協力を得ることができた。しかし、今年度は、より範囲を広げようと、国際交流に関わる団体に間に入っていたが、その団体も一緒に、県庁国際課などに説明、講座の開催のお願いに行った。その団体からは後日、病院から2件、企業からも問い合わせがあるので、また連絡をすると言われ、講座の開催について、こちらから積極的に開拓をせずにはいた。その後、その団体からは連絡がなく、病院関係については、「直接きぼうと連絡とるように伝えた」ということであった。残念ながら病院関係からは連絡はなかった。企業については、結局、その団体が独自に講座を行ったとのことであった。その他、県庁職員向け講座も実際に、県職員から当事業日本語教師の神山氏にコンタクトがあったが、実現せず、その団体に流れた。

今年度、その団体もやさしい日本語普及事業ということで予算化しており、その団体も講座のできるところを探していたのではないと思う。このように同じ事業に県などが取り組んでいて、同じように予算を消化したいと考えているときは、どうしても協力相手が同じになってしまう、取り合いになってしまうということが起こるのではないかと。こういった状況が起こらないように、協力体制をより強化しておく必要があると感じた。また、協働で行うメリット等をもっと話し合う必要がある。自治体がどんなことに取り組んでいるのか、取り組もうとしているのかを把握しておくことも、こういった事業に取り組む上での注意点だということを知ることができた。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

- ・「共生」を目指した地域社会の実現のための在住外国人の日本語力向上
- ・在住外国人が主体となるまちづくりのために必要な日本語力と地域理解の促進
- ・実践を通じた在住外国人と日本人住民の相互理解強化
- ・在住外国人の社会参加を目的とした日本語教育
- ・日本人住民の異文化理解促進を目的とした新たな生涯学習プログラムの開発

本事業の目的は、在住外国人と日本人住民が共に暮らせる地域社会の実現にある。そのためには、①地域在住外国人が日本語学習に意欲的に取り組み日本語を用いた社会参加を促進すること、そして②在住外国人の社会参加に対して日本人住民との相互理解を強化していくことが不可欠である。これらの取組は多文化共生社会の実現に向けた実践として位置づけられる。

具体的には、①ラジオの番組作成・出演によって、在住外国人が、外国人である利点を活かした自己表現や、地域社会へ参画する際に必要な日本語を学ぶ機会を創出する。在住外国人が社会参加のきっかけを得ることによって、日本語学習に対する意欲向上が期待できる。②日本人住民住民には、「やさしい日本語」に触れ、自らも使用する機会(生涯学習プログラム)を提供することによって、在住外国人に対する理解促進を図る。さらに、在住外国人によるラジオ番組作成・出演によって、より多くの日本人住民に在住外国人の取組を知ってもらうことで、地域における多文化理解の促進を図る。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

外国人が日本語を学ぶというより、日本語を使用して何か行動をするという点で、効果があったと思われる。日本語学習は目的や動機がないと進まない。だからといって、日本人からの観点で「学んでほしいこと」は、外国人の「学びたいこと」と一致するとは限らない。日本人の学んで欲しいことは、緊急時など日常生活で非常に大切ではあるが、いつその日本語を使うことができるかわからない。そういった日本語より、普段使用できそうな、また楽しいことに使う日本語を学習したいというインタビューの結果があった。そういった中で、この事業の「ラジオ出演」や、「やりたいこと、必要なことを日本語で」という取組は、外国人の日本語学習、日本語の使用へのモチベーションをあげることができた。特に「ラジオ出演」という、日本人でもなかなか経験できないことを経験することで、自分に自信を持つことが出来、また、日本人に対して自慢できるようなことができたということは、喜びであるとインタビューで答えた外国人がいた。

日本人側への成果としては、「外国人」というイメージが変わったということだ。日本人へのインタビューやアンケートの中に、「思ったより日本語が上手だった」「日本語で全く問題がなかったのよかった」「こんなに宇都宮のことを知っているとは思わなかった」「実家など、私たちよりいいところに住んでいてびっくりした」「私たちよりいい生活ですね」という感想があった。これは、反対に言えば、話をするまで、「外国人は日本語はあまり上手ではない」「日本のことはあまり知らない」「日本人より外国では大変な生活をしている」と日本人が無意識に考えていたというものの証明である。そういった「外国人」自体への理解が進んだと考えられる。

また、日本語面の感想として「こんな日本語がわからなかったんだということがわかった」「こういった日本語は通じにくいということがわかった」などの感想があった。これについても、普段なにげなく話している日本語が外国人にとって分かりづらい、または、わからないことがあるという学びの場になった。この学びは、外国人自体の理解と合わせ、今後の多文化共生社会にとって非常に重要なことだと考えられる。

(3) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

ミヤラジ関係者は、この番組を通して外国人や外国を紹介するような番組などを作っていきたいと話した。これは日本人が外国人に目を向けた証拠であり、地域の住民として意識したということだろう。実際に、スポンサーが見つからない状態ではあるが、ミヤラジの協力の下、番組を継続することが出来た。内容や放送日は変わったが、ミヤラジから「なくなってしまうと、復帰するのは難しい。細々とでも続けたほうがいい」とアドバイス、協力を受け、番組の継続となった。

「やさしい日本語」についても、佐野市女性ボランティア団体、自治体、栃木市国際交流協会、鹿沼市国際交流協会など、多方面から講演の依頼がある。文化庁委託事業での「お試し」を経験することにより、必要性、重要性を感じた団体が、自らの予算の中で講演を開催したいということにつながった。これは、この事業の成果であり、よくわからないものを「試す」ことができたことがより、広がりを見せた。この「お試し」がなければ、予算の中から「やさしい日本語」について支出しようということは考えられなかったはずである。これは、この事業の大きな成果、効果である。

(4) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

川柳、講座については、各市町の国際交流協会へ昨年度の冊子を配布とチラシを同封して配付し、広報活動を行った。また、栃木県国際交流協会のロビー等に講座のチラシ、冊子などを置かせてもらった。昨年度の成果等と一緒に配付することで理解を深めてもらおうと思った。

外国人川柳は、SNSで放送内容をアップし、いつでもだれでも聴くことができるようになっている。

成果の発信としては栃木市協働まつりに参加する予定であったが、台風のため中止となってしまった。来年度再チャレンジしたい。また、運営委員の協力を得て、運営委員が出している会報誌に外国人川柳を載せてもらった。その他、鹿沼市国際交流協会の会誌、イベントで事業について展示等をしてもらった。

その他、外国人川柳は、JFN賞地域賞を受賞したことが、新聞に掲載された。それにより、YOUTUBEやブログの閲覧件数が増加した。また、日本語学校等が興味を示し、学校での授業の一環として扱ってくれ、応募件数が増えた。

ミヤラジの出演者募集は、ミヤラジの性質上、宇都宮在住の外国人が優先になるため、宇都宮市国際交流協会に説明等を直接行った。放送の広報は、ミヤラジの広報誌、当校のSNS等で発信した。残念ながら、ミヤラジは録音はないので、放送をそのままSNS等にアップすることは出来なかったが、放送後、日本語教師、外国人出演者、パーソナリティーの写真をSNSにアップし、感想等を書き込んだ。

(5) 改善点、今後の課題について

一番の課題は、横の連携が難しいことである。6年間続けてきた事業だが、他団体、特に国際交流関係の協力はこちらから見た限りでは他の事業を抱えているという背景からか積極的ではないようだ。原因として、・それぞれが予算等をもっているので、別の事業への協力は、1年前などの事前要請がないと難しい・人材の協力をすると、その人材について評価されるのではないかと考え、自分の教室の学習者は協力させたくない。最後にできなかったときの責任の所在がこわい・同じようなイベント等では、協力よりもどちらがするかが問題になる・自分の実績にならないことはしたくない。こういったことが、実際に担当者と話をする中で感じられた。

こういった考えを払拭したく6年間対話を続けたが、なかなか前進しない。それはリーダーシップをどこが取るべきかあいまいである現状からか、横のつながり、または枠組みを越えた協力などの発想がないことが、栃木県の国際化が進まない要因であると考えている。「協働」という観点を、この事業自体の運営をしながら学んできたが、国際関係はこの視点が遅れていると感じた。「自分たちだからわかる」「自分たちしかわからない」ようなシステム作りや、考えで運営されていることが原因だろう。外国人を特別扱いをしているのは、この国際関係に携わっている人たちなのかもしれない。この「特別」という考え、感情を払拭するようなリーダーシップを例えば県などの行政単位がとることを提案したい。

(6) その他参考資料